句会案内

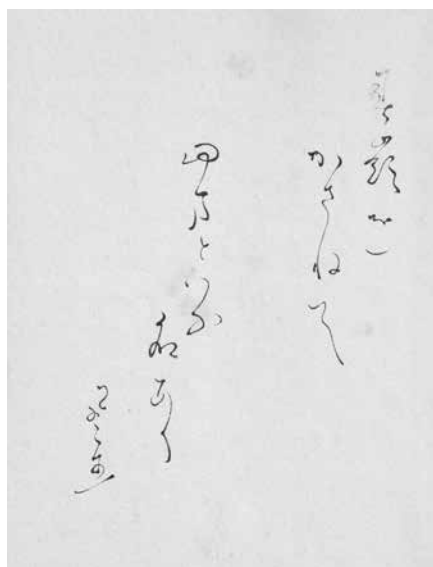
	日時	吟行地	句会場	幹事連絡先
香川わかば	5月11日 1時締切 （第2土曜）	自由吟行	未定 （現地で決定）	中村玲子 090-9771-7818 香川洋子
山梨わかば会	1時半締切 中旬	自由吟行		宮下時雨 0555-23-6881
如来寺俳句教室	5月2日 1時半締切 （第1木曜）	自由吟行	富士吉田市 如来寺	宮下時雨 0555-23-6881
なごみ会	5月27日 1時締切 （第4月曜）	持ち句	なごみ邸	渋谷乃里子 045-392-0400
クィーンズ会	5月14日 1時半締切 （第1火曜）	井の頭公園	武蔵野公会堂	大澤久美子 03-3301-3383 090-6797-6538
辻堂わかば泉会	4月10日 （第2水曜）	辻堂海岸	辻堂公民館	金子いづみ 090-9347-0340
辻堂わかば	5月22日 （第4水曜）	辻堂海岸	辻堂公民館	金子いづみ 090-9347-0340
鎌倉青葉	5月26日 1時締切 （第4日曜）	鎌倉	鎌倉生涯学習 センター	原田公子 0467-22-9396
渋谷若葉菊月	5月28日 1時半締切 （第4火曜）	新宿御苑	千駄ヶ谷社協館	金子いづみ 090-9347-0340
初花	5月1日 2時締切 （第1水曜）	自由吟行 兼題	恵比寿社協館	金子いづみ 090-9347-0340

自句自註

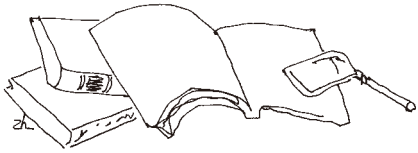
春嶺をかさねて四万といふ名あり

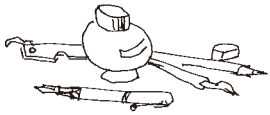
風生

山々が四方に重畳し、谷底に沈んだ感じの四万温泉というところ。四万という固有名詞の字面の面白さ。これは、この山の湯の地形と、縁があるかもしれぬ。――昭和二十四年、現地同志諸君が、わたしのためにこの句を刻んだ句碑を建ててくれた。



目　次





風生作品　自句自註……表2
わが俳句鑑賞……富安風生　2
さつき……遠藤風琴　3
風わかば集（無鑑査同人作品集）……4
あおば集（同人作品集）……宮下時雨選　8
句集鑑賞　染谷秀雄「息災」……野口山月　18
ふたば集（誌友作品集）……長谷川槙子選　20
あおば集鑑賞……宮下時雨　34
ふたば集鑑賞……長谷川槙子　35
「ふたば集」に想う　ふたば抄……長谷川槙子　36
風生俳句365日……富安風生　37
あおば集鑑賞　二月号作品より……笹目翠風　38
ふたば集鑑賞　二月号作品より……神岡喜代子　39
リレー日記……戸井田孝　40
高浜虚子――鬱然たる存在……あらきみほ　42
「わかば　まなびの会」記……永澤功　44
五月「わかば　まなびの会」のご案内……46
他誌拝見（受贈俳誌より）……47
お知らせ……48
一月投句の通信欄より……50
編集後記……52
「わかば」句会案内……表3

表紙絵：富安風生　題字：遠藤風琴

わが俳句鑑賞

富安風生

行春や白粉乾く瓶の底　　会美翠苑

女流の作品には、女流ならではのものと、女性男性を全く感ぜしめないものとある。そういう結果の現われるのは、作者の意図に因ることもあろうし、作者の識閾の外で、自然にそうなることもあろう。（いずれにしても程度の問題だが）どの方が正しいとか、正しくないとかいうべきすじのものではむろんない。ところでこの作品などは、その材料のえらび方といい、材料の調理塩梅といい、一読して女流の作であり、また、そういう性格の作品としてのよさを遺憾なく発揮しているといっていい。愛用する白粉のビンにじっと目を当てるということ自体は、女性にとって尋常茶飯事に過ぎないが、練白粉がもうビンの底をつき、底のまわりにかたく乾からびているとまで斬り込んで叙しているところは、写生で鍛えた描写であり、また、白粉という対象に対する女性の執着といわねばならぬ。対象のこういうデリケートな把握の上に、これへ配するに行春という季題を探り得たことで、一句は完璧となった。行春の情趣が一句全体を潤おしている。愛用の化粧品の一ビンを終るということと、春を惜しむ情感との間に、何か通ずるものがほのめくからである。それは、過ぎ去った青春に対する淡い哀愁といったものにまで、想像の翼をのべても不自然ではないであろうような、そんな何ものかである。

こういうふうに細かく味わって来ると、最後に、〝瓶〟という字が少し気になって来る。ビンには〝壜〟（字面はわるいが）という字がある。〝瓶〟をビンと訓ませるのは少し強引……などと思うのはわたしの間違で、念のために大言海に当って見ると、ビンは瓶の唐音とあり、鉄瓶その他の例が示されている。わたしは完全に降参、めったなことはいわぬものと、つくづく思った次第であった。

――思わず余談。

さつき

遠藤風琴

カレンダーめくれば五月輝ける

薫る風体の中をかけめぐる

息子よりわれの思ひ出武具飾る

毛氈の色褪せそめて武者人形

大西洋マストに泳ぐ五月鯉

蕉翁を偲ぶ象潟初幟

母の日や老いていまなほ母を恋ふ

風わかば集

（無鑑査同人集）

朱夏の森　庵﨑京子

遠見番ありし岬や南風吹く
鉄砲百合崖の海風鳴り止まず
着生の大谷渡り朱夏の森
木洩れ日を拾ひ滝道まだ遠し
鷺深く沈む青田となつて来し

黄落　今本まり

龍の玉風に磨かれころがされ
回廊の右も左も冬ざくら
黄落や欅林の金の洞
水仙の花照らし合ふ海の藍
藪柑子くるりと紅の実が覗き

初春　井上喬風

俳句もて余生愉しむ老の春
借景の企救富士臨む初景色
初春や俳句三昧とは懐し
短冊に心を鎮め試筆かな
身震ひで夙に目の覚む寒の入

明の春　江口かずよ

考の句の妣をうたへる明の春
懐手解きて一言ありさうな
年毎に姉妹似てき大旦
歴代の卵塔寂と笹子啼く
きりぎしに塒を巻ける冬木の根

木枯　遠藤由比

木枯や汽笛尾を曳く島渡船
木枯や沖にまたたく星の数
梅紅葉ひつそり散るや木遣塚
毘蘆遮那の印の御手に散紅葉
観音の御御足に触れ年惜しむ

山中湖　金子いづみ

湖光る小梨の花の咲く頃は
菜殻焚く火の懐かしき日暮かな
一本の猩々楓新樹光
一泊の朝の窓の皐月富士
めまとひを振り払ひつつ碑文読む

初詣　亀田多珂子

筆太の合格祈願初詣
松の内百日詣の一家族
神苑の熊笹騒ぐ松納
稲荷社の内陣暗き寒詣
初電話地震見舞となりにけり

初詣　川口修

大瀧を拝む位置変へ初詣
天地に轟く太鼓初詣
大絵馬の天翔ける龍初社
熊野灘こよなく晴れて水仙花
実南天色をつくせど人住まず

初芝居　小長谷敦子

初曽我や家紋ちりばめ金襖
初芝居かむり解けば切られ与三
繭玉や役者談義に余念なき
一瞬に文字踊り出す吉書揚
水仙や一途なるゆえ折れやすき

大青田　笹目翠風

高圧送電塔の影濃き代田かな
植゛終へし天水頼りの谷戸田かな
蒲の穂出づ時序に狂ひのなかりけり
水口を溢るる水音大青田
使ひ勝手良きと真竹の皮拾ふ

富士据う空　佐藤陸前子

この浦の矢棚貧しき初御空
初夢や富士据う空になにもなし
いつとなく散らばる机上福寿草
文机の蕾待たるる福寿草
筆買ひに春の踏切遠回り

鎌倉文学館　須田冨美子

鎌倉文学伝へ館の薔薇の園
一望す薔薇園越しの海の凪
薔薇園の頃のアーチはこの高さ
昃れば薔薇のくれなゐ単純に
黄の薔薇の尊きまでの蕾かな

はつなつ　辰巳奈優美

このあたり朽葉まみれに座禅草
谷地蕗の黄の燦々と流れあり
まろまろと花蜂はづむ桷の花
遠蛙子の寝支度のととのひて
はつなつや日にけに広き児の歩幅

石蕗の絮　中間恵子

槙の木の鶴翼美しき初社
掌にぬくき梅が枝餅や初詣
ちやんづけで呼ばれ八十路の初電話
渓川の音聞こえをる冬木の芽
飛び発ちてしばし逡巡石蕗の絮

どんどの炎　中間秀幸

どんど組む夕空に雲なかりけり
孟宗の笹穂の騒ぐどんどかな
翔龍の墨書燃え飛ぶどんどかな
心柱炎中に爆ぜつどんど燃ゆ
どんどの炎夕青空へ直立す

小春日　中山門外

一人居に蝶の舞ひくる庭小春
小春日の石のベンチのほの温し
藪抜けて見おろす景や村小春
遠見なる山の嶺高く鶴渡る
野路行けば鶴との暮し始まりぬ

聖五月　長谷川槙子

風光る文学館に恋の文
茶畠の中に真白きマリア像
老鶯や富士の裾野の修道院
はらからと語るシスター聖五月
富士山の向かうは知らず夏燕

新走　藤田ひろむ

顧みて遠雷つづく札所村
砥部焼の呉須際やかに秋深む
露滂沱渡り窯師の通ふ道
妻も卒寿酌みて一献新走
起き抜けに一人聴きゐる虫時雨

農始　宮下時雨

どんど焔に投げる注連縄匂ひけり
騎初や富士に白馬がよく似合ふ
整へる富士山駅の注連飾
淑気満つ鎌倉往還指呼に富士
農始生涯富士に見守られ

らふばいの　渡辺健

らふばいの蝋のとけだす日和かな
一文字のまぶしき白を刻みけり
白日を芯に抱きて滝凍つる
寒林に母子像の白痛々し
地に弾むために膨るる寒雀

あおば集（同人作品集）

宮下時雨選

（巻頭・次席以下五席のほかは五十音順）

宸筆の扁額かかげ花の春　制野和子

衛士溜り昼を灯して寒の梅

閉ざされし授与の小屋掛松も過ぎ

「連鶴」てふ白たぐひなき寒牡丹

旅寝する流人の島の冬銀河

神在す島へ日矢差す大旦　鬼本英太郎

千年の楠堂々と初御空

凛々と巫女の鈴の音初神楽

二神在す幽宮（かくりのみや）の初句会

木偶廻し浦曲に響く触れ太鼓

成道会先づは猊下の献茶かな　富張みよ子

成道会朱房はなやぐ墨衣

冬紅葉灌頂堂はひたと閉ぢ

蒼天へ寒芽を立てし大銀杏

寒牡丹痩せたる影をしかと曳き

半鐘を打ち山の集落出初式　竹林愛子

「忠魂碑」と希典の書や梅かをる

梅の寺傘さすほどの降りでなく

堂昏し札所しづもる春時雨

札所裏茶処のあり鳥総松

金色の月の出拝し年惜しむ　河合寿子

謹しみて初東雲に立ち尽くす

初詣靴の鳴る児を真ん中に

教へ子より卒寿迎ふと初電話

今少し気丈に生きむ小豆粥

結界の青竹太し初社　相川シマ

隊列の川鵜の飛翔初茜

法螺の音に住持入堂初薬師

盆栽の松の根方の福寿草

紫雲英田や阿蘇外輪の丘丸く　阿部久美子

立ち並ぶ千年杉や花吹雪

木五倍子咲く高千穂宮の闇浄し

海彦の島の夕映え月朧

初句会吉のみくじをふところに　新井きみ子

かむなびの杉百幹の淑気かな

わが代で捨てる鋤鍬農始

冬ざるる画鋲ばかりの掲示板

みちのくや空に白鳥地に静寂　池田マリ子

落雁のこゑこぼしゆく夕まぐれ

松島の島々明かし初時雨

菊の香や芭蕉を祀る小さき燭

手放せぬ物に執せる年の暮　一ノ瀬恵昭

御降の酒蔵通り人を見ず

狐火の近づいてくる村境

ひとしきり里曲の寒さ募り来し

左義長の火柱峡の空焦がす　岩﨑清子

左義長の夜風巻き込み火の粉舞ふ

左義長の藁小屋建てし日の記憶

左義長の果てたる峡の闇深き

脛太き男締め上ぐ冬構　犬丸由紀子

武家屋敷奥の暗きに花柊

座敷童ふつと消えたる暮早し

風花の暮色に舞へる白さかな

コップに活けし鈴蘭香る朝餉かな　大西外明

老木となりたる楠の新樹かな

風孕み尾鰭ひた振る鯉のぼり

菖蒲湯に肌若返る気分かな

餅花や昭和名残りの古時計　落合怜子

冬晴れや軍手軍足干す垣根

寒の水妣は一升瓶に汲み

どんどの火いつしか闇を深めをり

山脈を統べ初富士のみ空かな　神岡喜代子

神木の枯れて威を増す大銀杏

しづかなる気の張りつめし弓始

文机に向かふやすらぎ初日記

遥かなる阿波富士拝す大旦　金山久女

参道の見越の松の淑気かな

舞殿の「龍」一筆の吉書かな

みどり透くゆかしき野の香なづな粥

石蕗枯れて古沼寂しくなるばかり　茅島泰子

余生とは授かりものよちやんちやんこ

句座と言ふ明日への力冬木の芽

臘梅の香に引かれゆく逢魔時

大欅二本並立つ淑気かな　神田喜子

盤石へ翳せる冬の梅固し

銅葺の唐門厳と寒紅梅

寒梅の凛と紅濃し招魂社

神山の白く輝く冬の雲　木原嘉子

寒晴の空をうつせる閼伽の水

池波に向ひし鴨の胸を張り

塔頭のもの音のなき冬の月

「伝統の絆」心に深く読初　久保英美

八十路とは余所のことかや初鏡

国生みの幽宮（かくれのみや）へ乗初め

二神の鎮座の宮に初詣

先づ射すは恵比須祠に初日かな　齋藤ふみえ

漁夫の出て初日を拝む家の門

寒晴や入江に寄する波の綺羅

岬山のベンチに凭れ日向ぼこ

テレビ画面の能登の地震に初泣す　佐藤邦子

点袋選る愉しさも年の暮

紅絹をもて什器を撫でし松も過ぎ

満開の梅の白さへしばし佇つ

ひとひらの雲を武甲山に春近し　島田芳惠

日脚伸ぶ寺の板絵の童子らに

初社日向大事に御朱印所

初音かな秩父霊場音楽寺

煤払ふ夫の遺影も古びたる　鈴木正江

晩年の母似となりし初鏡

松過ぎて常の一人の夕餉かな

門松の切口乾き松明くる

花楓高きに翳し鐘撞堂　関口良子

墓山の磴の凝しきほととぎす

読経の止めばしきりにほととぎす

夏鶯のこゑ澄めりける座禅中

天蓋の振れて地震知る年始め　菅原美保

けふのみの秘仏小さきお元日

掌に載せて水占みくじ寒の水

その洞に龍神伝説名の木枯る

鳶低く低く輪を描く小春かな　武政ひろし

小春日やうすうす懸かる昼の月　田嶋利子

他愛なき話また良し縁小春

初鴨の思ひ思ひの水尾を引き　辻　佳世

花街の名残の路地の冬薔薇

何もなき棚田たつぷり寒夕やけ　土門きくゑ

棚田守の要の松の手入かな

初春や海の向かうの子の便り

雪空のもと淋しらの園めぐる

風鐸のときに高鳴る寒の雨

影を引く木々のびのびと春隣

存へし身の安穏に春近し

銀の利尻嶺凛とお元日

電力風車増え海陬の初景色

寒夕焼鳥居の荒磯千畳に

うすうすと利尻嶺据ゑて寒夕焼

ゆつたりと返す渡舟や夏雲雀　鳥越久美子

瀬枕に触れんばかりにつばくらめ

玉砂利も磨く御廟やほととぎす

名盤に偲ぶ指揮者やリラの花

水口の幣に風立ち棚田植う　中村かよ

四五人の結を頼みの棚田植う

はかどりし植田見下す小昼かな

はや競ふ棚田のすみの余り苗

卒寿なり俳家を賀する大旦　並木桂子

たらちねの茶筅古りをる初点前

末の子の慎ましやかに初点前

日当りに若菜育む茶庭かな

花桐の愁ひの色に零れそむ　野村悦子

紫のいくすぢ雨の桐の花

ねぢ花の螺旋を蟻の登りゆく

ポケットに句帳と鍵や青き踏む

噛むほどに効き目あれよと寒の水　野口山月

寒林の紆曲の構図墨絵めく

すずしろの語音の美しき薺粥

お経石埋む親鸞霜のこゑ

遠富士の際立つ白さ初御空　長谷美智女

初凪や鳶の高舞ふ磯伝ひ

水墨の色に沈みし寒の鯉

しみじみと卒寿過ぎたる薺粥

人気なき立子の墓や実万両　原田公子

敷藁に日差し普く寒牡丹

白鳩の並ぶ浮橋春近し

ほつほつとくれなゐなせる枝垂梅

喧嘩独楽ぶつかり合ひて横つ飛び　花輪美意子

蒼天にうなりてのぼる喧嘩凧

まばたきもなき寒鯉の深睡り

細波の岸に寄り来る浮寝鴨

初富士の全容湖に現じたる　早坂洋子

香煙を春着の胸へかきよせて

百幹の丈あをあをと雪晴るる

寒の雨たたく日蓮獅子吼の地

裁ち初めの切つ先分かつ羅紗の音　平本くに子

断崖に水仙花揺れ日本海

遠山に雪見ゆ今朝の空青し

雪来ると幾度仰ぐ今日の空

万里より漲る波濤初茜　藤枝昌文

群雲の一谷を射る初日かな

母の恩仏の恩の初法座

立宗の八百年に淑気満つ

掌に触れ大綿の命かな　藤岡孝子

春近し雲を遊ばせ空青く

水仙の向きそれぞれの影の揺れ

歓喜天祀る寺苑の寒椿

初便り忌にあることを二た三こと　藤川宏子

二三輪ふふみ初めたる寒の梅
探梅の心あてなる径たどる
日脚伸びしが嬉しと日記書く

海坂を朱鷺色に染め初茜　藤田武郎

一島に金色の日矢初日影
初凪や輪をゆつたりと島の鳶
早梅の一輪赤し尼の寺

初寄席や袖の屏風絵昇り龍　松田奉子

出囃子や最前列に春着の娘
初高座ほろ酔ひ声の大むかう
宵の口噺家ゆくやとんび着て

界隈に鳴り響かせて十夜鉦　美島迪代

念佛に緩急ありて十夜鉦
横座りして膝かばふ十夜婆
山門に小酒盛りして十夜寺

若水の硯の海のあふれしむ　美野玲子

諳ずる好みの一首筆始
甲辰の試筆の墨のにほひたつ
初日影八十路なかばの身に纏ひ

初日の出嬢歌の山の筑波山　宮本立男

万葉の筑波の嶺の初日の出
筑波嶺の空を焦がしてどんどの火
冬耕の腰を伸ばせば筑波山

神話なほ息づく宮居初神楽　山岡仁美子

二柱坐す御陵の淑気かな
大楠の神話の杜に初句会
神斎く島の明けそむ四方の春

朝日さす恵比寿に始む福詣　山本ふぢな

写経会の紙筆調ふ四日かな
初東風や緑衣尊き寿老人
太鼓腹の布袋尊像冬ぬくし

初句会終へ和やかに酌み交はす　吉川道男

友の訃をもたらす寒中見舞かな
寒晴や富士良く見ゆる富士見台
人日の小町通りに人流れ

桐一葉一葉と風に誘はるる　吉田房枝

着ぶくれて夜の街角コンサート
大歳の茶房の壁に飾り凧
住み着きし国衙の原に初日浴ぶ

霜囲ひ藁の香匂ふ法の庭　渡辺久美子

恙なく正月迎ふ三世代
砥部焼の花器に水足す三日かな
山並みと寒夕焼を視て飽かず

慰霊碑を囲みて匂ふ水仙花　浅倉サカヱ

能楽堂見下ろしてゐる冬木の芽
香を放ち身じろぎもなき水仙花

産土の道懐かしき除夜詣　浅見秀渓

梵鐘の巡り賑はふ除夜詣
除夜の鐘聴きつつ戻る法の山

秩父嶺々率ゐる武甲山初御空　新井捷子

狛犬のでんと居座る大旦
強霜に息止めてゐる畑の菜

瑠璃鶺目交に来し初景色　石井ヱイ

日溜りに行きつ戻りつ檻の鶴
それぞれに讃ふる一句冬ぼたん

初富士や多摩の連山従へり　伊藤惠重子

故郷の祠に小さき鏡餅
初春や明けの眉月新たなり

母より受け娘につながる雑煮かな　岩下圭子

山茶花や水琴窟の音澄める
雪吊の水鏡して揺れ止まず

護摩堂の火の粉畏み初詣　大塚恵子

臘梅の蕾ふくらむ日和かな

鮮やかな冬ばら掲ぐ時計台　岡田暮煙

懸大根かつて銀座と呼ばれしが

わが生の残り火揺らぐおでん酒

朝日子に映ゆる仏塔山眠る　小澤八重子

お降りの庭石ぬらす程のもの

うち晴れて秩父連峰初景色

まゆ玉の影のやさしく枝垂けり　尾野千惠子

元朝の緋に染まりゆく芙蓉峰

成人式四代繋ぐ袴かな

寒風や絵馬の願ひを音にして　川西英子

元旦の地震の悲劇や祈る日々

春隣在宅診療終りけり

咲き継ぎし大鉢寒のシクラメン　串田時子

初買やこの町一のパン工房

淑気満つ太きうねりの一つ松

意気込みを秘めて和める初句会　佐々木けい子

旧道の細きを辿る福詣

雲形池一面にして薄氷

小さき木の玩具のやうな冬囲　塩見惇子

浜垢離の真砂盛られし初社

産土の初松籟や幟旗

成人の娘を囲みゐて初写真　菅原昭夫

うち仰ぐ富士見櫓に初日燦

三方に髭がいのちの飾り海老

おのづから声高ぶりぬ初披講　武田惠子

磯宮を守り継ぐ蜑や松飾り

鳴き交はす声に張りある初鴉

船頭の仕切るどんどや火の猛る

息白く杖をたよりの宮詣で　豊泉文子

産土神の注連の青さも松の明

冬すみれ和銅遺跡は妣の故郷　長谷川夏果子

山肌に湧く秋水の苔滑り

残る萩ひと株ゆるる萩の寺

本尊は啼薬師とや赤のまま　山内時子

幾星霜蕉風今に枯野原

草庵の籬一色実南天

遺髪塚屋根葺き替へて灯せる　山内紀子

賀茂御祖や斎庭賑はふ初蹴鞠

声高く蹴鞠初めの賀茂御祖

静もりて狭庭散り敷く紅椿　山谷和久

寺町の通り静かや枇杷の花

豆腐屋の桶をあふるる寒の水

駄菓子屋の賑はふ路地や冬休み

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2024年5月号

特集 「百鳥」30年の軌跡
○「百鳥」主宰・大串 章インタビュー
○大串章自選30句
○論考〜大串章の世界　太田土男
○エッセイ　八木幹夫
○一句鑑賞〜大串章の各句集から
甲斐のぞみ　池田ブランコ　望月周
西口麻里　青池亘　藤井智恵子
平田倫子　北川玉樹
○創刊当時の思い出　森賀まり
○「百鳥」作品抄　抄出・石崎宏子
○「百鳥」の主な歩み　望月周　ほか

〈グラビア〉俳句界NOW　石寒太

特別作品21句　波戸岡旭「天頂」

発表
第16回文學の森賞
第25回山本健吉評論賞

私の一冊　今井聖「街」
※セレクション結社「樸」恩田侑布子

「俳句界」投稿欄　一流選者11名！日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社文學の森
お求めは…●〒169-0075　東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

染谷秀雄氏の第三句集「息災」を読む

野口　山月

昭和十八年東京生まれ東京育ち。二十三歳の若さで俳句に目覚め、山口青邨氏に師事し「若草」新人賞を受賞した。青邨氏亡き後は、「屋根」誌の斉藤夏風氏に師事し、のち終刊となり、現在は「秀」誌の主宰を務めている。これまで「譽田」「灌流」を編み今日に至っている。句歴の長さに加へ、俳人協会の要職を務め後進の指導に当たっている。そうした来歴からしても、読み応えのある一冊である。

☆句集の「息災」は

九十の兄の息災冬はじめ

ご実家に転居し、兄上様と同居し身の回りを手助けせんと、優しい心遣いに敬服します。

☆越冬地より

広げたる羽に夕日や田鶴の群れ

語り部のしづかに鶴を見る人に
鳴き交はす鶴に時雨のつづきけり
冬菊の屑に色ある鶴の墓

一句目　羽を広げあたかも夕日を抱きかかえたようだ、その瞬間を捉えている。

二句目　語り部は、見る人に鶴にも気遣う細やかな様子が伝わって来る。

三句目　この頃の時雨は、断続的に降り冬に向ふ。その寂しさに堪え切れず、喉奥から甲高い声を発したのである。

四句目　越冬中に命を落とした鶴の墓である。長旅を共にした絆を思うと、哀しみがこみ上げてくる。

☆春の句では

流鏑馬の馬場の湿り春の霜

疾走の駿馬の蹄が霜を蹴り上げていく、臨場感溢れる句です。柵沿いの見物客の吐息や歓声も聞こえてくる。

大川の荷船の上を花吹雪

大川は隅田川下流の異称で、隅田公園の桜は有名である。荷船や屋形船が花吹雪をかぶりながら行交ふ、江戸情緒を詠まれている。はたまた

大いなる満月上る猫の恋
荒縄の如く沈みぬ蝌蚪の紐

命を繋ぐ猫も蛙の産卵も、自然界の命の大切さを句にしている。

☆夏の〝風物詩〟

篝焚く鵜飼始めの夕磧
鵜匠まづ手縄を水に浸しけり
休み鵜のつぎを待つ間の追ひ篝

篝火は、集魚灯の役目を果たし、また鵜匠の手作業からも、不可欠な灯りである。磧での篝の準備、手縄を水に浸し、篝に追ひ焚きをしている所作を、一つひとつ拾い上げており、写生の基本をお示し下さっている。

☆暮らしの句

ややこしく飛ぶ銀蠅の行方かな
柴又の改札口の燕の子
まるまると夜干し三日の笊の梅

銀蠅は人との闘ぎ合いを、演じている。また東京柴又は、江戸川の自然と人情が残る町である。梅干しは「三日三晩」の土用干の言い伝いがある。伝統手法が息づいている。

☆大利根の秋

とくとくとやがてしづかに落し水
大利根の風に向き変へ稲刈機
カウベルのゆるやかに鳴る花野かな

利根川の下流は大規模な水田地帯で、落し水の時間経過がよく分かる。その地から筑波山の裾野まで視野は広がる。その大景が描かれている。カウベルを付けて悠然と過ごす牧場の花野が浮かんできます。

☆師を偲ぶ句

青邨忌特集を組み年暮るる
訥々と語る師の声年惜しむ
師の墓を訪へばつくつくほふしかな
一方のその手冷たし師は病みぬ

師の病を気遣う、作者のお人柄がよく伝わって来ます。益々のご健吟を念じております。

山月記

ふたば集（誌友作品集）

長谷川槙子選

（巻頭・次席・四句欄ほかは五十音順）

すれ違ふ長き船笛御慶かな　新潟　浅野寿一

丹精の芽数を増やす福寿草

凍土や地震に崩れし石灯籠

友からの地震の見舞や初電話

紐締めて一際響く初鼓　愛媛　諸伏静江

シャンソンにシャンパンの音女正月

注連飾る新藁の籾つきしまま

大鋸屑に跳る大えび年新た

水仙のひとつは上を向いて咲き　東京　石原みもざ

三歳も二十歳も笑顔お年玉

初詣交通整理に僧の出て

祖父が読む祖母の得意の歌かるた

高空の点となりゆく凧　神奈川　田代洋子

富士山を抱かんと敷く宝舟

肩ならべ葉牡丹次の色を見せ

初茶湯帛紗さばきの音ながれ

白極め白にふるへる寒牡丹　神奈川　永澤　功

獅子舞のかくかく耳を鳴らしをり

咲き誇ることなき谷戸の梅早し

妻よ来よ冬の銀河を渡り来よ

野の風に微かにかをる掛大根　鹿児島　中園美智代

干潮の鳥居を潜る師走かな

天神の洞を明るく石蕗の花

縮れ毛の葉に丸々と島大根

滔々と四国三郎淑気満つ　徳島　新居智津

天平の礎石整然風冴ゆる

大楷の尉となりたる淑気かな

身の幅の九十九折ゆく竜の玉

抱きし子と拍手を打つ初詣　神奈川　冨士原康子

明々と月の残れる初山河

初湯して無心に星を数へをり

能登塩に緑あざやぐ冬菜かな

水仙や切岸を打つ波の音　東京　宮崎國秀

百歳と玄孫相寄る初写真

鳶の笛螺旋に上る初巳かな

初詣海の向かうの富士仰ぐ

大根を妣と煮つけし味に煮る　香川　宮本順子

大掃除終はらぬままに煤湯かな

母逝きぬ重詰料理作りをへ

春待つや孫の婚礼願ふ父

群青の海とのあはひ初茜　兵庫　森　敦子
初茜神在す島の岩立てり
なゐ止まぬ能登半島は雪の中
白銀の波の輝く野水仙

左右に揺れ明石大橋初霞　兵庫　横井加織
初詣姉の長寿を祈りけり
亡き母の面影娘らに成人の日
鉄瓶は母の遺品や初点前

寒風や光る小波向きを変へ　東京　明冨士孝子
生きてゐる事が奇跡や除夜の鐘
鈴なりの柚子摘み終はり空仰ぐ

寒風やすぐに赤らむ鼻の先　東京　足立友子
朝食は夫の担当小正月
寒風の水面ざわめく光かな

霜晴の秩父連山鮮らけし　埼玉　新井英子
和銅開珎の絵馬連なれる初社
磨かれし行幸記念碑初社

銀の海の彼方や野水仙　東京　石塚正子
冬の梅父の遺愛の紅匂ふ
冬深し戸袋の鳴る夜更けかな

父の背に負はれ桜を通り抜け　大阪　石原一則
通り抜け斯くも様々桜狩り
葉桜となれど繁盛屋台酒

くにうみの島浦凪ぎぬ漁始　兵庫　泉　栄子
大寒やなかなか開かぬ瓶の蓋
空澄むや粥占神事の一の宮

縁側でにらみきかせるかじけ猫　神奈川　出田　恵
石畳まつすぐに延び冬ざるる
山門の隅に一輪水仙花

初日浴び我身の軽くなりにけり　長野　犬飼浄美
年賀仕舞告げし友の身案じけり
冬晴や四方見渡す鬼瓦

筆ペンの扱い難し賀状書く　東京　いのもと英香
仏壇に一献手向け去年今年
寒夕焼郷へ戻るといふ友と

とろとろは母の好みし雑煮餅　兵庫　江川隆子
御降りの旅も神慮と静心
蕪村塚朝の静寂に笹子鳴く

サーカスの天幕つつむ冬日差し　東京　延命洋子
初雪に気もそぞろなる学級会
雪吊りや離宮の景の整ひぬ

淑気満つ男神女神の御座す宮　兵庫　近江美佐
還暦の句帳は赤に明の春
寒の内割れ硝子めく瀬戸の海

紙袋抱へ二日のコインランドリー　東京　大澤久美子
髭を剃る夫を横目に初鏡
寒に入る動きの遅きプリンター

初買は藍染めと決め店覗く　神奈川　大島愛子
水琴窟へそそぐ柄杓の寒の水
春著着て知る体力を諾へる

繭玉を揺らす拍子や敷舞台　東京　太田陽子
侘助の花ざかりなる狸塚
露座仏の眠れるお顔日脚伸ぶ

弾初や黒紋付に銀の帯　兵庫　大歳晴美
海空の明るさ受けて野水仙
大鳥居潜る一歩や年新た

冬の雨本一冊を買ひに出る　神奈川　大村典子
新春の箱根に雲の湧きたちて
初春や駐輪場に朝日さし

大神へ神の声なる祝詞かな　大阪　岡田東紀子
泣き笑ひの今や八十路の屠蘇祝ふ
初神籤見入る娘の真顔かな

散り急ぐ木の葉時雨の中に佇つ　埼玉　小川かずこ
滝落つる音を辿るも初詣
浮雲の茜に染まる初筑波

歌姫の墓守りたる夏木立　京都　小倉紀美子
雲の影のみ動きをり五月富士
雲の影写し佇む雪解富士

神杉の木洩れ日浴びて初詣　山梨　奥脇榮美子
釣舟の散りたる山湖冬晴るる
連山を浮き彫りにせる初茜

餅を切る力の入りて賑やかに　埼玉　小野麻美
注連飾青き匂ひに誓ひ立て
月冴ゆる強き心で帰路につく

ざくざくと霜の花踏むランドセル　神奈川　折口桂子
柔らかき日に冬草の瑞々し
鎌倉の海煌めきて春近し

餅花のあふるる社屋活気満つ　香川　香川洋子
泰然と座する羅漢に風寒し
自転車のサドル濡らして時雨過ぐ

舞初や袴きりりと拍子踏む　神奈川　影山澄江
七種や故郷の野の匂ひして
押し遣ればまた戻りくる風呂の柚子

静けさの年の夜明かす山の宿　徳島　笠井貞子
ひかりては鳥ごゑ零れ初景色
辻井戸の寒九の水を汲みにけり

臘梅のほのかに匂ふ日差しかな　東京　加藤弘子
名園の空漆黒の寒鴉
枝先にふくらみ初めし冬芽かな

かつぽれを踊る八十路の足袋白き　千葉　金子なか
梵鐘に句のきざまれて風生忌
息白し馬も手綱を引く人も

印房の閉店告ぐる年の果　兵庫　釜谷ゆき子
山頂の雑木黄金に初日影
重ねきし齢確かむ初鏡

念入りに老いを繕ふ初鏡　山口　河村眞理子
すす逃げの主婦堂々と美容院
初空を悠々自適鳶一羽

葉牡丹の花壇縁取る濃紫　神奈川　神田雅舟
初春の響き清らや水琴窟
蜂蜜の白く固まり寒に入る

賑やかに赤き山茶花こぼれけり　東京　北原美和
海に立つ富士を遠目に初詣
母呉れし茶箱の底のちやんちやんこ

生き生きと賀状に松の緑かな　東京　工藤のり子
スコップ立つ待春の土若々し
水仙やオブジェのやうな鋤と鍬

玉砂利のひと足ごとの淑気かな　茨城　久保田寛
七草粥吹けば仄かに野の香り
御神籤の大吉挟む初日記

産土の初日をこぼす御神木　兵庫　小谷恵美子
石仏を祀る岩屋の野水仙
断崖の風にふるへる野水仙

まつすぐに心に射せり大初日　山梨　小林祥子
初暦まづ書き入れし句会の日
餅搗くや父の遺せし杵と臼

生かされて生きて米寿や明の春　東京　金野節子
七草粥庭のはこべも加へけり
弁天堂龍の口より寒の水

房総の山懐に若菜摘む　千葉　斎藤一向
灯台の白きはやかや初日の出
初空へ澄み渡りゆく鳶の笛

初電話七つはなれし姉の声　群馬　斎藤美代子
何といふ静けさのあり梅白し
神前へ供ふ湯気立つ小豆粥

初富士や振舞酒に頬そめて　神奈川　坂本啓香
故郷の富士の干菓子や初点前
読初の付箋の多き句集かな

とりあへずおでん煮返す日曜日　山梨　櫻井すゑ子
初句会披講の襟を正しけり
たゆたへる小舟一隻山眠る

冠雪の富士染まりゆく夕まぐれ　東京　澤村幸子
春を待つ花のとりどり誕生日
フルートの音色やさしき春隣

真白なる鷹匠の息鷹の息　東京　春藤千恵
青天を突き雪吊のきらめける
花びらに蕊の影落ち梅白し

新春へ秒読みタクト振り上げて　神奈川　白石亮子
新春や国旗はためく路線バス
丸ビルに新丸ビルに大門松

寄り添はぬ一蕾のあり福寿草　東京　白子瑠美子
冬桜風の色もて開きけり
もう一度聞きたし母の手毬唄

新春や久方ぶりの甥の顔　京都　菅山路
山茶花のたわわに咲きて零れけり
水仙の健気に伸びて花一輪

子に着せむ衣桁に掛けし春着かな　神奈川　鈴木一蕗子
枝寄せて炎育てる焚火かな
駅前の広場のベンチ冬日和

満天の星のまたたく除夜詣　山梨　鈴木文代
大富士の彫り深めたる初日の出
雲一つなき大富士にある恵方

御手洗の竜のかがやく初社　埼玉　強谷幸雄
金運の絵馬の連なる初社
朝日子のいともまぶしき冬木の芽

しみじみと湯舟につかる明の春　香川　高倉美恵子
師を偲び縁より眺む寒の月
春隣旅人となり駅に佇つ

蓋とればまり麩の浮ける雑煮かな　香川　高橋めぐみ
網で焼く餅の香りや祖父を恋ふ
注連飾濡らす札所の小糠雨

箪笥前母の着物で年迎ふ　神奈川　高原沙織
初電車窓を離れぬ子を抱き
子等よりも遅くとりたる歌留多かな

診察を待つ間の廊下冴えかへる　東京　田中倫子
お汁粉を作り友待つ雪催
八十路へと破魔矢の鈴を鳴らしけり

沈香の棚引く部屋の淑気かな　神奈川　谷川節子
あかあかと山脈照らす初日影
厳かに元旦祭の祝詞あぐ

一番星見つけて帰る年の暮　山口　田村明子
数へ日や帰り来る子ら思ひをる
年の瀬の満月山の端出で来る

健やかに米寿生きんと日記買ふ　群馬　千明貞夫
一年の出来事おもふ柚子湯かな
露の世や地蔵は肩を寄せあへる

ひつそりと碧く熟しぬ龍の玉　山梨　坪井美智子
雪煙を巻き上げ聳ゆ今朝の富士
そつと起き去年の火種を吹きにけり

含ませる墨芳しき筆始め　神奈川　戸井田孝
鎌倉の町懐に山眠る
戦争も平和も生きて屠蘇を酌む

路地の子の母へ駆け寄る青蜜柑　鹿児島　冨松章子
秋日差芝生の青さ衰へず
夕風の吹き込む狭庭冬兆す

鐘楼の屋根の眩しき照紅葉　埼玉　直井はるみ
ふらふらと虚子の墓前に冬の蝶
頭より大きなリボン七五三

娘らの無事今日も祈りて寒の朝　群馬　中井野はな
早春賦母と唄ひて日向ぼこ
小雪舞ふ赤き薔薇の実震はせて

紅に染む秩父連山年暮るる　東京　中島勢津子
杖持ちてベンチに二人日向ぼこ
見上ぐれば寒満月や独り旅

笑む夫の遺影と酌める年酒かな　埼玉　中城久恵
笙の音の斎庭に響く寒の婚
凍緩み蝶の高舞ふ屏風岩

眉引けば身の引き締まる初鏡　神奈川　中村恵子
リハビリの夫と手を取り初詣
辛き世も笑まひ忘れじ福寿草

失名の筆美しき賀状かな　香川　中村玲子
被災地の屋根一面に今朝の雪
日脚のぶ五重塔の影長き

香煙の豊か師走の浅草寺　埼玉　中山紫苑
金堂の花頭窓美し冬紅葉
数へ日の空きし一と日をもてあます

騒立てる水面初日の乱舞せる　神奈川　沼田瑠美
籠り居に活を入れたる冬の雷
庇より礫となりて寒雀

初場所の贔屓力士の五連敗　神奈川　野嶋美波
お正月あつと言ふ間に孫帰る
初日出眩きほどの水平線

夜行バス見送る母や雪霏々と　東京　野口優子
やはらかき光を抱き冬木の芽
探梅の磴百段を上りけり

インバネスケープルカーを待つ女　東京　濵野民子
生命線確かに在るや去年今年
初護摩や膝に孫乗せ手を合はす

松過の人のあふるる小町通　兵庫　平岡春風
寒椿一輪飾る手水鉢
石仏に一輪翳す寒椿

母の背に寝入る子の背小春の日　新潟　藤田節子
雪の夜や風生歳時記傍らに
夫酌むは越後の銘酒明の春

百二歳の翁より受く年賀状　山口　藤元民子
お屋敷の玻璃戸開かれ明の春
淑気満つ周防の国の総社かな

紅白の餅を賜る初詣　徳島　藤若智女
拍手のめでたきひびき大旦
懇ろに息子一家の初電話

電線に入れ替りして寒雀　神奈川　古屋登美子
人参をうさぎのやうに好みけり
人参の彩り楽しお弁当

人見知りする児を抱く御慶かな　群馬　堀江節子
泣き止みて前歯二本の初笑顔
被災地に逝く人悼む冬の虹

小吉に息災願ふ初みくじ　兵庫　松下利明
凶もよしと笑ふ息子や初みくじ
妻の煮るごまめ黒まめ母の味

初日受く巫女の黒髪粛々と　香川　松田清子
待春や宮居の大楠根を四方に
細き月水面に揺るる今朝の春

頂きし余生の春や趣味に生く　山梨　三浦恒子
四季の富士乗せて吉田の新暦
お正月厨の隅に紅を引く

七度目の年男なり初仕事　千葉　三島せいほ
初御籤神のお告げの凶を引く
寒夕焼並ぶ木立の黒々と

まつすぐに淑気満ちたる段葛　神奈川　南出眞弓
餅花の揺れて華やぐ祖母の声
梢より雫七色春近し

青空に掛け声響く出初式　神奈川　峯岸みつね
松過ぎの珈琲香る昼下り
路地裏の小流れかをる梅早し

初春や神楽女楚々と鈴を振り　兵庫　三原聡子
拝殿の大注連飾神垂そよぐ
神宿る大楠仰ぐ初旦

成人祭着飾りし娘が涙せる　山梨　宮下栄江
手を繋ぐ成人の日の父娘
成人式富士を背に撮る母娘

一本の天を突き刺す冬木立　香川　宮武季代
番傘をさして晴着の孫笑ふ
孫と居て遊びばかりの三日かな

病む夫のひと日は永し冬至風呂　埼玉　武藤圭子
行幸記念樹ことに耀ふ初社
寄り添へる夫婦神杉冬ぬくし

鏡割母が手馴れの木槌かな　東京　村上清子
大寒の力うどんをすすりけり
脱力は基本の基本初稽古

声聞ゆ白寿の母の年賀状　東京　村木慶子
年齢の順に名を書き祝箸
梅紅し友三人と喜寿迎へ

麓より拝むこんぴら初明り　香川　安川トミヱ
参拝の列絶ゆるなき三ケ日
左義長の焔の先はこんぴら宮

新春の淡路の島に能楽師　兵庫　柳明子
鏡餅仕上げは父の大きな手
霜が降り息ふきかけてゐる子供

間合よき寒柝じんと仕舞風呂　東京　山名信代
行きずりの小さき祠に初詣
蘊蓄の銘酒高々新年会

初明り心にちちとははの居て　神奈川　山本美智子
大服は父の手捻り備前焼
冬ざれや薄ら日を抱く木々の梢

老いて尚笑顔で歩む明の春　東京　横山郁子
初場所や力士の意気込みもらひうけ
雨戸あけ青空仰ぐ冬の朝

澄みわたる空に真白き冬の月　群馬　吉岡米子
初雪や庭に飛び交ふ鳥の声
軒下に乾鮭吊るす越後かな

春着きて良く笑ふ子に紅を引く　神奈川　吉田絹子
ひつそりと白椿活く立子墓所
初電車窓いつぱいに白き富士

池涸れて色の違へる淵二つ　福岡　吉田秀子
撫牛に列続きをり初社
楼門の昇り竜の絵初詣

初凪の淡路橋立鳶舞へり　兵庫　米田静子
大神と縁を結ぶ初句会
寒晴の一ノ鳥居に祝詞聴く

初松籟真白き垂のひるがへり　神奈川　若林和美
背の小さき藪巻は何おんめさま
大島の遠く眩しき春隣

大根吊る父の知りをる風の道　群馬　若林綺羅々

七草の青き匂ひの厨かな

玉砂利を踏めば今年の音がする

初風呂に木曽の桧の香りかな　山梨　渡辺秀子

飯うまし琵琶湖の沖に寒の虹

寒卵一人暮しのお見舞ひに

母のこと細々記し年賀状　長野　飯田のぶ子

園児等の元気な声や蜜柑山

主なき垣の山茶花華やげり　兵庫　大継淳子

寒の水水琴窟の音響く

成人式マニキュアの色祖母に見せ　神奈川　木下智光

粕汁や一家の命あたためて

数へ日や親しき友の逝く報せ　香川　佐藤由美

短冊に友の気息や星冴ゆる

生かされて生きてこそ今年迎ふ　埼玉　佐藤玲美

客去りて静かに過ごす三日かな

ひと揃へ若菜を刻む一人の居　栃木　曾我部美恵子

梅の香に誘はれ巡る小径かな

濛々と火をたく舟の厄払　高知　髙野雅勝

初点前担ぐ柄杓の真新に

裸木となりて欅の瘤あらは　神奈川　田川ひでみ

野水仙風に縺れて相背き

落葉して日差し豊かや富士大き　山梨　田辺和代

散り敷ける銀杏落葉に日の匂ひ

モネ展の余韻にひたる寒桜　神奈川　野中照代

空青し上野の森の寒桜

両の手に初えびすの福授かりぬ　徳島　葉柳美智子

福さづくえびす廻しの藍座敷

切山椒「売り切れ」と云ふ片笑窪　群馬　村矢聞

板チョコを一列齧る革手袋

最近の名句集を探る　座談会

司会＝筑紫磐井

大西朋　小野裕三　甲斐由起子

◉人と作品

浅川芳直 句集『夜景の奥』

総論……対馬康子

一句鑑賞……小川軽舟　坂口昌弘　高野ムツオ

能美茅柴『悠紬』　染谷秀雄『息災』　本井英『守る』

◉武蔵野大学国文学会 特別対談

「一回性の醍醐味」

井上弘美 × 桃沢健輔

◉巻頭三句

星野椿　増成栗人　大高霧海　浅井陽子　小川晴子　水内慶太

◉今月の華

後藤章　島貫恵

◉俳句と短歌の10作競詠

西生ゆかり　睦月都

◉好評連載

成瀬政博　とりあえずの日々

筑紫磐井　俳壇観測

坂口昌弘　忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人　句の手触り、俳人の響き

大西朋　俳句へのまなざし

井上泰至　俳句の詩語 イメージ辞典

神作研一　てのひらの江戸 ―古典籍を旅する

藤村公洋　俳句のつまみ

堀田季何　諸家書架

二ノ宮一雄　一望百里

俳句四季 Haiku Shiki

2024年5月号　4月20日発売　定価1100円（税込）

https://www.tokyoshiki.co.jp/　東京四季出版

〒189-0013　東村山市栄町2-22-28　☎042-399-2180

あおば集鑑賞

宮下時雨

札所裏茶処のあり鳥総松　竹林愛子

札所とは仏教の信仰のために、三十三ヶ所または八十八ヶ所の霊場で、巡礼者が蝋燭を立て、線香を手向けて参拝したしるしとしてお札を受ける、また、御朱印帳に署名捺印して戴くところが札所である。その裏には長い石段や急坂の長旅の巡礼者が疲れを癒すための、湯茶を接待する茶処が設けられている。その茶処からは瀬戸の島々やひろびろとした太平洋の荒波が光り輝き、四国第一の名峰石鎚山も遥かに望めるであろう。作者はふとその場の鳥総松が目についた。鳥総松とはその昔樵夫が木を伐った後の切り株に樹霊を祀るために、挿した梢のことと言われており、その梢が根付けば縁起が良いとされている。確かな肥えた俳人の目である。

木偶廻し浦曲に響く触れ太鼓　鬼本英太郎

木偶とは木彫りの人形、あやつり人形のことである。木偶廻しとは新年になって、首に人形箱を掛けて、町屋の玄関や店頭に立って種々の人形をあやつり舞わせて、御祝儀として金銭を請い歩いたもののことである。各家々では年頭の旅芸人の訪問をめでたいものとして喜び、御祝儀を弾み御神酒で持て成したりもした。また木偶廻しは「くぐつし」とも言われ、一種の漂泊民の集団であったが、後に職業集団を作り諸国を巡り歩いた。浦曲とは海岸線の入り組んだ磯のことで、そこまで木偶廻しの触れ太鼓の音が響いてくると言う。木偶廻し発祥の地と言われる「摂津国」兵庫県にはまだ残っているものと思われ懐かしい。戦後昭和二十年代には、万歳、獅子舞、猿廻し、鳥追等がまだ残っていたが、今はすっかり廃れてしまった。日本古来の伝統芸能が一つまた一つ消えてゆくのは淋しい限りである。

国生みの幽宮へ乗初め　久保英美

国生みの島とは瀬戸内海随一の淡路島のことである。幽宮（カクレノミヤ）とは神霊が永久にとどまる宮殿のことであり、御祭神は伊弉諾大神「男神」伊弉冉大神「女神」の二柱神である。古事記・日本書紀によると、二柱の神はこの島に降り立った時に夫婦の契りを結ばれ、国生みの儀式を行い、最初に誕生したのが淡路島であり、後に「大八洲」と言う古代日本が出来上がったと伝えている。幽宮は御皇室の祖神と仰ぐ天照皇大神の御両親をお祀りすることから、歴代の天皇や皇族が参拝されている。このような由緒ある御社に自動車で数十分で参拝出来る処に住まわれることは羨ましい限りである。

ふたば集鑑賞

長谷川槙子

すれ違ふ長き船笛御慶かな　新潟　浅野寿一

船の汽笛が行き違う。作者はそれを、船同士の交わす年始の挨拶であると詠う。蒸気の噴出によって鳴る汽笛の音色には趣がある。詠まれているのは音であるが、晴れて淑気の漲る洋上の景まで見えるようである。「長き」船笛であることが、更なる情趣を添えている。

注連飾る新藁の籾つきしまま　愛媛　諸伏静江

この句の季題は「注連飾る」。年の神の降臨に備えて、年末に注連縄を飾ることをいう。藁縄と紙垂以外には何も（海老・橙・昆布等を）付けない、シンプルなものが想われた。今だ香りを残す藁には、籾がついている。新藁の季節の、その地の暮しをも想起させる。

鏡餅仕上げは父の大きな手　兵庫　柳明子

大小の餅を二つ重ね、縁起物を添えて正月の神仏に供える。その仕上げを任された父上の、神妙な面持ちが目に浮かぶ。行為を詠まず、父の「大きな手」に焦点を絞った終り方が巧い。心臓の形を模したとも言われる鏡餅に、家内安全の願いがこもる。

麓より拝むこんぴら初明り　香川　安川トミヱ

香川県琴平山の中腹にある金刀比羅宮。麓から仰ぎ拝む作者に、ほのぼのと元日の朝が訪れる。寒気の中の、暁光と山影のコントラストが美しい。「こんぴら」と仮名書きにする作者の、地元の金毘羅さまへの親愛の情も感じられて微笑ましい。

病む夫のひと日は永し冬至風呂　埼玉　武藤圭子

冬至は、一年で最も昼の短い日。思えば、それは日中元気に活動していてこそ実感できることである。病む人にとっての一日は、昼夜を問わず長い……と闘病中のご主人をひそかに思い遣る作者。優しい妻の一日の終りを、温かい柚子の香りが労っている。

餅花の揺れて華やぐ祖母の声　神奈川　南出眞弓

華やいだのは餅花か……と思いきや、実は傍に居る人の声だと、読者はすぐに気づく。紅白の餅花の愛らしさや優美な枝垂れが、明るい声と相俟って、めでたく楽しい気分を醸し出している。その場に居るのは、綺麗な春着を召されているであろう御祖母様と作者。

初明り心にちちとははの居て　神奈川　山本美智子

明らみ始めた元朝の東の空。作者はふと、懐かしいご両親のことを想われたのであろう。心情のよく感じられる句でありながら、曙光の中にお二人の面影が浮かび上がったかのような、視覚的な美しさも湛えた御句。

「ふたば集」に想う

風（が吹く）、浴衣（を着る）――普通の文章においては必要な（　）の部分を、言わずに済むのが俳句です。「吹く」と言わない代りに「花菜風」「若葉風」と詠め、「浴衣着る」と同じ五音で「藍浴衣」と詠えます。正しい省略は、俳句にとって無くてはならないものです。

省略に「正しい」と冠するのは、意味を解らなくする省略を認めないからです。例えば「食卓に一念発起の薺粥」という句を、私は、普段台所に立たない男性が、意を決して家族のために薺粥を拵えたと解しました。ところが実際は、七日粥を前に銘々が一年の抱負を話すという家族の習いを詠んだ句だそうです。であれば、「一人づつ抱負述べたる薺粥」でしょうか。「薺粥」という年初の季語が在れば、「一年の」は省略しても通じます。「一人づつ」も、「薺粥」を共に食するような親しい人達と想像できます。省き過ぎが禁物なのです。

先日、冬の野鳥観察会に赴きました。アオジ、シギ、シメ、ツミ、ノスリ、ハイタカ、ヒタキ、ヤマガラ……私にとって季語でしかなかった鳥たちが、双眼鏡の向うに居ました。琴弾鳥の異名を持つ「鷽（うそ）」の雄の喉元（薔薇色）の美しかったこと。そのものを見て名を覚えることの大切さを、改めて思い知らされました。

ふたば抄

雲の影のみ動きをり五月富士　小倉紀美子
押し遣ればまた戻りくる風呂の柚子　影山澄江
水仙やオブジェのやうな鋤と鍬　工藤のり子
まつすぐに心に射せり大初日　小林祥子
とりあへずおでん煮返す日曜日　櫻井すゑ子
濛々と火をたく舟の厄払　髙野雅勝
網で焼く餅の香りや祖父を恋ふ　高橋めぐみ
八十路へと破魔矢の鈴を鳴らしけり　田中倫子
一番星見つけて帰る年の暮　田村明子
頭より大きなリボン七五三　直井はるみ
早春賦母と唄ひて日向ぼこ　中井野はな
やはらかき光を抱き冬木の芽　野口優子
生命線確かに在るや去年今年　濱野民子
お正月厨の隅に紅を引く　三浦恒子
板チョコを一列齧る革手袋　村矢聞

五月十日

中空に日のとどまれる牡丹かな

風生は草花を愛して、草花の句を多く残しているが、中でも牡丹の句はことのほか多い。『季題別富安風生全句集』及び「補遺篇」に載るだけでも、一三五句を数える。ことに晩年、九十歳を迎えた年に、「牡丹百句」に挑戦したことは有名である。この句は、そのゆかりの寺、高田馬場薬王院（東長谷寺）に、弟子加倉井秋をの設計で句碑に刻まれている。句は、中天にかかった日と、その下にある牡丹という単純な構図のほかは一切を省略している。「日のとどまれる」という表現によって、牡丹に曙光を送った太陽がしだいに高度をあげて、いまや中天にさしかかっているという時間の経過を示している。曙光を浴びてかがやく無垢の牡丹、やがて日ざしが強まって花びらが開ききり日中の色に変わってゆく牡丹、そして、真昼間の牡丹の時点で時は止められた。句柄の大きい作品といえるだろう。

（鑑賞）鈴木貞雄

（昭和二十二年作・「若葉」二月号所載）

あおば集鑑賞

――二月号作品より――

笹目翠風

秋冷の武甲山は襞を深めたる　新井捷子

即物写生の行き方ではないが、季題の本義を確固と理解した叙法である。〝秋冷〟は冷やかの傍題だが感覚としてやや違うと言えよう。鋭い印象だ。朝夕に眺める武甲山の山膚の襞も、秋冷を覚える時節には陰影を帯び、鋭く深くなったように作者には思えたのである。作者の感性は鋭く、平板ではない。

小さき手で器用に回す木の実独楽　岩下圭子

作品の素朴さは得難い。如何なる技巧修辞にも勝る。木の実独楽を回している子供は、幼けない年齢である。作って貰った木の実独楽を回す様を、作者は傍らから見守っていても器用に回すことに驚いているのでもある。小さな手でしっかりと上手に回す様に、作者は甚く感心したことが推察される。情景が客観的且つ具象的に捉えた叙し方であり、あやふやなところは些かもない。

菰巻の歪み加減も春隣　大西外明

多くの歳時記は菰巻を、藪巻の傍題としているが、目的が違う。菰巻は初冬に松等を害虫から防護するために、幹に四、五十センチ巾の菰を巻き、荒縄等で結び、その中に、越冬する虫を捕えるものだ。作品は春も間近となり、菰巻も風雨雪等により、縄の結び目も緩び歪んで来た様を発見した作者は、場景のありのままを叙述しているのだ。季題の働きによって趣き深い句になったと言える。

峡住みの戸毎の梅の綻べる　関口良子

品格の整った句である。句意は説明するまでもない。早春、梅の花の咲く頃の峡の集落の情景が確然と季題を核として詠われており、基本に則った楷書の趣きである。芭蕉は『去来抄』に「いひおほせて何かある」と記し、虚子は『虚子俳話』――文字を惜しむ――の項に省略に省略を重ね、文字を惜しむに惜しむと諭されている。抽出句は荘重な味わいであり、措辞に無駄がない。

秋天の傾くあたり九十九里　藤枝昌文

抽出句は実景からのイマジネーションを季題の力を活用して述べた手法である。また地名の効果によって渺漠と続く九十九里浜の長汀が思い浮かべられ、天が傾いているとの感懐も、然もありなんと思われる。片雲もない快晴の大空や太平洋の濤音が聞えて来るようである。一句は観念的な発想措辞のように思えようが、大景が見事に捉えられており、季題を掌中のものとして使いこなしていると言える。

蓮の実の少し斜めに飛ぶ構へ　吉田房枝

季題に蓮の実飛ぶがあるが、初冬、台が枯れ乾燥すると、実の穴に隙間が出来ることによって自ずと、実が零れ落ちるのが実際である。飛ぶことはないと思う。作者は台の一粒の実が、少し斜めであることに興味を持ち、多分、飛ぶ頃合を見計らっているのであろうと推測した次第を諷詠しているのである。まことに巧まない簡素素朴な詠み口だが、滋味深く底光りする句である。無芸の芸と言うことの一例と言えよう。

ふたば集鑑賞

――二月号作品より――

神岡喜代子

生き甲斐を句に置く余生文化の日　三浦恒子

これからの生き方を一七音に十分に詠みきっている。読み手に負担をかけない素直な心地良さがある。これからの作者の俳句に対する心の弾みも自ずと見えてくる。増々の御健吟を。

間引菜の色鮮やかに朝の汁　飯田のぶ子

一見、単純な表現に見えてその実、即物写生で朝の膳の様子が生き生きと見えてくる。間引き菜の柔らかさ、色合い、そして土の匂いまで印象される。

秋思ふと遥か眼下に飛驒の町　宮下栄江

秋は、物思うこと、心に感じ入ることが多い。奥飛驒の景を詠まれたのであるが飛驒は、霧が深く視界を悪くするが、晴れると奥深い山々が連なりその静けさに圧倒される。山の深さ、静けさなどが一体となってふと感じたのである。

競りに出す牛の眸潤む草の花　片山紀子

競りの景は映像でしか見たことがないが、牛はその運命を知ってかどうか入口ですごく尻込みをして抵抗をしているようである。よく見ると牛の眼が潤んでいる。草の花は、地味で可憐なものが多く特に、秋に咲く草の花はやがて枯れる。そこに牛の運命を重ねて詠まれたのである。

銀杏散る人急がせるビルの街　戸井田孝

見たもの感じたものに句材を拾い、季語に心情を託して詠まれている。読み手がいろいろ想像できる余白もある。ビル街の暗さや、乾いた音までも聞こえてきそうである。

補助輪を少し浮かせて鵙日和　泉栄子

鵙の鋭い鳴き声は澄んだ大気によく透り秋を感じさせる。そんな気持ちの良い日にお子さんか、お孫さんかは存じませんが、自転車の補助輪を浮かせて走ることができた。その成長の喜びと、鵙の高音が素直に伝わってくる。

一両がホームはみ出す豊の秋　延命洋子

見たままの作為なき句は、素直に心に入ってきます。山間の小さなホームでは、よくこのような光景を目にします。「はみ出す」と豊の秋が響き合ってさらっとしたユーモアを感じさせ俳味もある。豊の秋は、事に稲の実りの良いことをいうが、見わたすかぎりの田の黄金色は人々に幸せを感じさせる。

〈リレー日記〉

俳句との二度の出合い

戸井田　孝

私には二度俳句の出合いがあった。最初の出合いは学生時代である。入学して間もない頃、知り合った友達に誘われて俳句の会に参加した。俳句には興味はなかったが、友達が出来るので、俳句の会に参加した。清崎敏郎先生の教え子の俳句会であった。俳句に身が入らなかったが、皆んなとの集まりや、夏冬の合宿で千葉の勝浦、群馬の日向見で過ごした事は楽しい思い出である。

その頃の古い句帳二冊が今は残っているだけで、先生にしてみれば教え甲斐の無い生徒だったと思う。

二度目の出合いは、それから六十余年後の事である。八十も半ばを過ぎて、体力の衰えもあり、運転免許証の返納を期にそれまでの趣味を止めた。その後何をするか、思ひ当たったのが学生時代の俳句だった。

市で発行するパンフレットを頼りに鎌倉若葉会に見学をお願いし、句会に参加した。隅の方に座っていたが、遅れて来た風琴さんと隣合った。句会の進め方など知らなかった私に色々教えて頂いた。富安風生の名前は知っていたが御息女との事で恐縮したのを覚えている。

たまたま入選した句もあり、風琴さんの勧めもあって句会に入会し、若葉に投句も始めた。それから五年目に入っている。入門書、解説書、句集等を読んで努力したもののはかばかしい進歩は感じられない。毎月の句会の投句を揃えるのも大変である。

唯俳句に出合った事で自然や四季の移り変わりに敏感になり、身のまわりのあらゆるものに関心が深まり、自分の世界が豊かに広がった事を実感する。

九十の坂を越え遅々たる歩みであるが、これからも折角の二度目の出合いを大切にしていきたいと思っている。

令和5年度 第37回通常総会のお知らせ

第37回通常総会を開催いたします。

協会の活動や現状をお知らせし、ご意見を伺う貴重な機会です。協会の今後のため、万障お繰り合わせの上、ご出席くださるようお願いいたします。

今回は会場を、皇居にも近い法曹会館に移しました。昭和初期のクラシカルな会場にて、総会、着席ビュッフェでの懇親会、若手俳人によるミニシンポジウム、そして協会賞、花鳥諷詠賞、第2回稲畑汀子賞の授賞式も開催いたします。

皆様のご参加をお待ちしています。

日本伝統俳句協会会長　岩岡中正

●日　時　令和6年6月9日（日）

通常総会　午後1時30分～午後2時45分

懇親会　（着席ビュッフェ・会費一万円）　午後3時～午後5時

・ミニシンポジウム

「芸としての俳句（仮）」

木暮陶句郎（「ひろそ火」主宰）

長谷川槙子（「わかば」副代表）

和田　華凜（「諷詠」主宰）

・協会賞・花鳥諷詠賞・稲畑汀子賞授賞式

●会　場　法曹会館　東京都千代田区霞が関1丁目1－1

●総会議案

・令和5年度事業報告・決算報告

・令和6年度事業計画・予算案（報告）

・その他

●総会議案の資料は機関誌「花鳥諷詠」6月号に掲載。

会員の皆様には別途往復はがきにて出欠のご意向を伺います。

高浜虚子について

あらき　みほ

高浜虚子――鬱然たる存在

高浜虚子にお会いしたことは勿論ないのだが、写真家土門拳の『風貌』で拝見した虚子のお顔に、「あっ、こういうお方かもしれない」と、なぜか納得したことを思い出している。昭和二十六年、虚子七十八歳のお顔であった。

虚子の、ボーッと黙りこくった近寄りがたく掴み所のなさを、能のシテの姿のように感じていたが、対象を底まであばくといわれる土門拳の偶然と非情と激情のシャッターが掴んだ一枚の写真は、虚子の真の姿ではないだろうか。

随縁のように師事することになったのが、高浜虚子晩年の高弟・深見けん二先生である。私はいつしか、花鳥諷詠とは何だろうと知りたくなり、虚子とホトトギスに集った俳人たちに興味をいだくようになっていた。

虚子に心服した俳人も、虚子に反発した俳人も、今は私の心のどこか一部である。この「虚子と虚子をめぐる俳人たち」を書くことで、私なりの虚子像を掴むことが出来ることを願っている。

■文化勲章を受章

高浜虚子は、昭和二十九年十一月三日の文化の日、俳人として初めての文化勲章を、明治・大正・昭和の三代にわたる俳句上の功績に対して受けた。

受賞の通知を受けた十月二十五日、虚子は正岡子規の墓参をした。子規と出会い、碧梧桐と出会い、俳句の道に踏み込んで、気がつけば六十年以上の月日が過ぎていた。虚子は子規の墓前に佇んだ。

このとき。虚子の胸中を、これまでの俳句への想いが走馬燈のように過ぎった。

――子規の没後、子規を中心として共に俳句革新を進めてきた碧梧桐が新傾向俳句へ向かってしまった。俳句は碧梧桐に任せて小説を目指そうとしていたが、子規門の双璧の一人として虚子は、碧梧桐に対抗し、子規の文学を継承して子規の文学を祖述していく者は己自身でしかないと考えるに到った。大正元年、ホトトギスに雑詠欄を復帰させた虚子は、大正二年、再び俳句へ立ち戻ることを決意した。

――ホトトギスの俳人たちと雑詠欄や句会や吟行で実作を重ねる中で、虚子は「俳句は特殊な文芸である」ことを確信し、昭和三年には、「俳句は花鳥諷詠詩であり客観写生は方法論である」と提唱した。

――昭和十年前後には、虚子とホトトギスの俳句に対抗する新興俳句運動が起こり、戦後しばらくすると反花鳥諷詠論が出

てきて、季題を疎かにした俳句がもてはやされるようになった。

――しかし、俳句という伝統詩の性質そのものが花鳥である季題を詠むことであり、そこが長所でもあり短所でもある特殊な文芸である。花鳥諷詠詩であると唱えて二十五年以上経ったが、「俳句は花鳥諷詠詩である」と、提唱したことに今ますます誇りを持つようになってきている。

――俳誌「ホトトギス」のおよそ六十年間に、多くの若い逸材がつどい、虚子の透徹した批評眼と鑑賞眼と広い心で、新しい個性ある作家を育て、その多くの作家たちは今日の俳壇の隆盛の花となっている。

祝はるることも淋しや老の秋　　十月二十五日
参りたる墓は黙して語らざる　　十月二十五日
我のみの菊日和とはゆめ思はじ　　十一月三日

一句目、子規も碧梧桐も去った今、虚子だけが長寿を得、俳句に対する功績として文化勲章を受賞したが、こうして祝われることに虚子は一抹の孤高の淋しさも感じていた。

虚子は受賞の気持を、「玉藻」昭和三十年一月号の「立子へ」の中で、次のように書いている。「文化勲章を拝受して、有難い事だと思つてをる。それにつけても子規並びに其周囲に居った人々を思ひ出す。又思ひは現俳壇の人々にも及ぶ。決して私一人の力に由るものとは思はない」と。三句目、「私らは、芭蕉以上、蕪村以上になるつもりで俳句を作っている。それくらいな抱負がなくて、明治大正の文芸家ということができようか」と、かつて雑誌「能楽」（大正五年）に書いた虚子である。受賞のこの日、一人の力とは「ゆめ思はじ」と詠んだのは、子規没後の五十年間の俳句界をリードした虚子らしい自負の反語である。

十一月二十九日は角川書店主催の祝賀会が東京会館で行われた。会場には、歌人土岐善麿（土岐哀果）もこの祝賀会に出席していた。虚子と同じく新作能を試みた土岐善麿はまた、中学生の折、子規没後の根岸句会へ参加して虚子選に入ったことがあるという。土岐善麿エッセイ集『春望』（蝸牛社刊）には、虚子らしさを彷彿させる一文がある。

「まだ三十歳前後であった高浜さんが、当時のわれわれには、すでに現在と同じような、鬱然たる存在であったことが、むしろふしぎなようにさえ回顧される。……青年として早くも老大家の風格があったと共に、いま老大家としてなお青年のような気迫をもつことに対して、しばらくはぼく自身ももほとんど年を忘れるごとく感じていた……」と。

土岐善麿のこの言葉は、大結社ホトトギスと俳壇をリードしてきた虚子を的確に掴んでいる。

「わかば　まなびの会」記（第九回）

令和六年三月十七日（日）
於　鎌倉生涯学習センター

永澤　功

冴え返り冴え返りつつ春なかば（西山泊雲）の頃、鎌倉に馳せ参じた俳人二十名（初出席五名）。

吟行地「鎌倉自由吟行」兼題「弥生」投句は兼題含めて五句。互選五句。投句締切十三時。

選者の選句、講評の緊張した時間が過ぎた後は、作者よりの質問に答えていただく、いつもの充実した時間となりました。落選した句についても批評がきかれるので、なぜ採られなかったかがわかり、良い勉強になります。十六時、催花雨の中、帰路につきました。

長谷川槙子先生のお話

「弥生」このとらえどころのない季語の本意を、詠もうと努力された句が多く見られました。この句作の姿勢は大変大切なことです。特に実体のない「時候」の季語は、その本意をもう一度良く理解して詠みましょう。

選者　長谷川槙子氏の作品

江ノ電は海へ傾く鳥雲に
春泥に光のかけら化粧坂
馬酔木咲くやぐらの奥に水の音
虚子眠る谷戸の高きに花辛夷
命惜しとふ立子の句碑や椿落つ

長谷川槙子氏選

特選

春風にきらめき廻る風見鶏　藤岡孝子

春風の中、風見鶏がきらきら輝きながら回転しているさまが目に浮かぶ。「きらめ」いているのは風見鶏でありながら、春風の「きらめき」まで感じさせるところが妙。読者は風見鶏に命が宿っているような感じさえ覚えて、心がときめく。

大島をはるかに浮かべ春の海　藤岡孝子

天候に恵まれると、江ノ電の車中から、又この会場の窓からも大島が遠望できる。三原山を抱き、椿に彩られる伊豆大島を「浮かべ」ていると詠うには、やはり春の海がふさわしい。火の島が長閑な大海に浮かんで、揺れているような錯覚が愉しい。

鳩サブレ尾よりかじりぬ春の昼　川名律子

鎌倉の銘菓「鳩サブレ」の愛らしい顔を最後まで楽しむべく、尾の方から少しずつ齧ってゆく。そういう食べ方をするのは、眠

気を催す程のんびりした春の日中がよく似合う。暖かでまばゆい日差しに恵まれた、作者の幸せなひとときを想う。

下駄箱に名札の揺るる弥生尽　原田公子

「弥生尽」は陽暦四月の終り。ゴールデンウィークも近いその頃には、子供達も幼稚園や学校での新しい生活に慣れてくる。下駄箱に付せられた名札の揺れが、新学期早々には持ち得なかった心のゆとりや、伸びやかさを想わせる。

独り居の二階にそよぐ花ミモザ　原田公子

「独り居の二階」の窓から眺めるミモザに、どれほど心が和むことであろう。他人事ながら、大いに共感できる。「そよぐ」は、ミモザの花房が放つ芳香まで感じさせて、巧い措辞。「花ミモザ」の「花」が外せれば、なお佳い。

山門の奥に風音苔竜胆　峯岸みつね

寺門の奥の風音を聞きとめた作者の耳、地味に咲く苔竜胆を見留めた作者の眼を称えたい。低く小さな春咲きのリンドウの風情が、清らかな境内のしじまを引き立てている。作者の心の有りようまで感じさせる一句。

今日の一句（五十音順）

ふくふくと蕾色づき暖かし　出田　恵
海苔浜をぬける微塵のひかりかな　犬丸由紀子
苔光る彌生の雨となりにけり　遠藤風琴
歌垣の筑波は遥か烏雲に　遠藤由比
墓の愛子見るは三国の春の虹　延命洋子
辛夷ゆれちさき板碑は苔むして　太田陽子
潮入の池面煌めく弥生かな　尾野千恵子
白銀の弥生のけやき碧天へ　河嶋博子
鳩サブレ尾よりかじりぬ春の昼　川名律子
春光のボートに当たる水の音　菅原美保
白つつじもう咲いている段葛　直井はるみ
金色の弥陀仏拝す春愁　永澤　功
独り居の二階にそよぐ花ミモザ　原田公子
青天に木蓮の花びつしりと　樋口一郎
春風にきらめき廻る風見鶏　藤岡孝子
春の風幅半間の路地ぬける　三枝正子
山門の奥に風音苔竜胆　峯岸みつね
切通の風やはらかき弥生かな　宮崎國秀
春光や水面にゆらぐ虎頭岩　村上清子

5月「わかば まなびの会」ご案内

日　時　5月19日（第3日曜日）

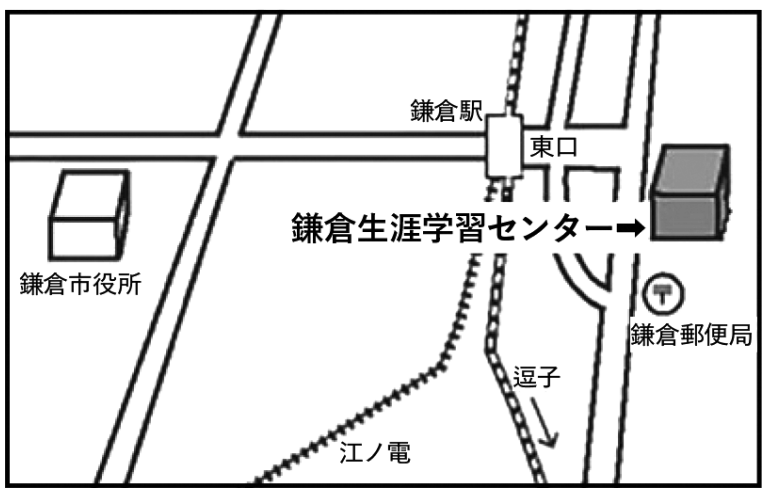
吟行先　鎌倉（自由吟行）　　兼題：余花

句会場　鎌倉生涯学習センター　4階
〒248-0006　神奈川県鎌倉市小町1丁目10-5
電話　0467-25-2030
5句投句　13時投句〆切　11時30分より入室可

会　費　千円

選　者　長谷川槙子　電話080-9436-7541

※4月号にて、5月「まなびの会」は、香川県での集いに振り替えることとし、中止をお知らせをしましたが、ご希望がありましたので改めて、鎌倉での5月「わかばまなびの会」を行うことと致しました。



他誌拝見　受贈俳誌より（2月号から）

編集部抽出（五十音順）

初春や鶴亀睦む輪島椀　馬醉木　徳田千鶴子　負けまじく極月のわが食ひ力　知音　行方　克巳
石榴の実戦争をとめられぬものか　阿蘇　岩岡　中正　冬に入る弓場の鏡濁り無し　知音　西村　和子
菟絲子忌の桐の広葉を春の雨　繪硝子　和田　順子　山も野も乗継ぎ駅も紅葉づれる　栃の芽　畠中　草史
初音きく心にぽつと灯が点り　愛媛若葉　髙岡　周子　弱法師の一幅に会ふ梅の頃　雛　福神　規子
冬芽膨らみ命はばたく時季を待つ　風の道　大高　霧海　産土の通ひ路いまにからしばれ　ピリカ　辰巳奈優美
太宰府は一千年の枯野へと　花鳥　坊城　俊樹　水鳥や遠くに浮ぶ比良比叡　岬　仲井　亮二
冬芽立つ鎌倉街道二身巾　耕　加藤　耕子　待春や障子に映る鳥の影　湧　甲斐　遊糸
遊びせむとや綿虫のここかしこ　鴻　増成　栗人　はたとある歳晩の貌夜の鏡　雪解　古賀　雪江
告ぐる人なくて初夢すぐ忘れ　栞　松岡　隆子　冬の寺仏師の気骨隆々と　ランブル　上田日差子
熱気球上がる大地や草萌ゆる　春嶺　古澤　宜友　さみしさやひとりの嵩の菊膾　りんどう　倉知真木子
涼新た窓の守宮の真顔なる　橘　佐怒賀直美　ペン皿にたたみ置かるる秋扇　りんどう　降旗　牛朗
農小屋の四隅が暗しちちろ鳴く　多磨　関　成美

お知らせ

◆遠藤風琴、宮下時雨は、俳人協会の三月総会にて名誉会員となりました。

◆5月29日～31日は、香川県での「わかば」の集いがあります。参加される方には、ご案内がお手元に届いていると思いますが、いよいよ今月末になります。飛行機で行かれる方は29日羽田でお待ちしています。新幹線で行かれる方は、丸亀でお会いしましょう。

どなたも健康に気を付けてお過ごし下さい。皆様にお会いできることを楽しみにしております。

◆八月十九日は俳句の日です。山中湖で十八日、十九日の1泊2日で集いを行います。今年は、「花鳥」主宰坊城俊樹先生が選者として参加して下さいます。六月号に詳細を載せますので、ご参加くださいますよう、お願いいたします。なお、宿泊場所は、秀山荘を予定しています。

一月投句の通信欄より

北海道　辰巳奈優美

「わかば」新年号の美しい表紙に魅了されました。風生先生の枇杷の絵の色彩が映えています。枇杷が好物だった亡父を思い出しました。

群馬　中井野はな

わかば一周年おめでとうございます。本年度の風生先生の表紙絵は枇杷ですね？実家の庭に十本の枇杷の木があり毎年木登りをして楽しんでいました。今年は風生先生の枇杷を堪能致します。

千葉　金子　なか

日々、編集部の方々お世話になっております。風琴さん始め皆様健康に留意され編集にたずさわって下さい。これからもよろしくお願い致します。

千葉　斎藤　一向

元旦の午後の能登半島地震には驚きました。今後の日本列島に恙無きことを祈る次第です。

埼玉　島田　芳恵

初句会に参加させて頂きました。今月から投句させて頂きました。何卒宜しくお願い申し上げます。

東京　石塚　正子

能登地震お正月どころか住む場所もなく水道電気等々、私に出来る事は募金しかないので、気持ちばかりですがしたいと思っています。

東京　岩﨑　清子

「わかば」の風生先生の表紙絵にはほっこりと心の温もりを感じます。本年もどうぞよろしく御指導下さいますようお願い申し上げます。

東京　神岡喜代子

今年から「わかば」の表紙は風生先生の「びわ」の絵になりましたが実に素敵ですね。嬉しくなりました。今年もよろしく御願いいたします。

東京　串田　時子

令和六年早々の能登地震の大きさに驚き一か月になる今も避難生活を余儀なくされている方々。停電、断水を報道で知るのみで心が痛みます。改めて自分の身の回りを見直しています。

東京　田中　倫子

振り返れば一年はあっと言う間です。今を大切に俳句にこれまでよりも時間をかけて勉強します。

東京　早坂　洋子

創刊二年目の春まことにおめでとうございます。

これからも楽しみに致しております。編集所の皆様ありがとうございます。

東京　山名　信代

筑後出身の実家の母の習いを守って暮の「年取会」には大きな年をとるようにと鯨と豆の煮物と煮ナマス、お正月の雑煮はけんかはするめと「スルメ」をよろこんぶと「昆布」を入れます。鯨が入らず夫と渋谷の鯨屋で食べたことがあります。

神奈川　大島　愛子

おめでとうございます。本年もよろしくお願い申し上げます。

神奈川　川西　英子

苗木で戻った蠟梅四本が三メートルから五メートルに育ち新年早々から芳香を放ち今も満開で、地上の水仙と共に黄色に輝いています。俳句に詠めず残念です。

神奈川　影山　澄江

本年度より「ふたば集」の御選が長谷川先生になられたとのこと。庵崎先生には一年間お世話になり有難うございました。また長谷川先生にはどうぞよろしくお願い申し上げます。

神奈川　田代　洋子

年初より能登の大地震に被害甚大です。近隣の皆様方御無事でしょうか。御見舞申し上げます。防災の心得見直しを致しております。

山梨　奥脇榮美子

大寒に合わせた様に裾野も大雪の予報でしたが降っては消えて畠は白くなりましたが積もりませんでした。その内に雨に変り止んでしまい、ほっとして居ります。

山梨　小林　祥子

長谷川先生の御言葉すごく嬉しくなりました。一月号の添削後の句「はつ」として読ませて戴きました。「何だかよい句になったな」と一字の違いだけでと思いました。今後共どうぞよろしくご指導下さいませ。

京都　小倉紀美子

先日、伊賀上野に行き芭蕉生家記念館蓑虫庵などを訪ねました。人の少ない古い町並みをゆったり見学。美味しい伊賀牛を頂き俳聖かるたなどお土産も買い楽しい時間を過ごしました。

兵庫　三原　聡子

いつもお世話になりありがとうございます。本年も宜しくお願い致します。

鹿児島　冨松　章子

御縁がありまして、中間秀幸先生、惠子先生のもとで学んでおります。十年以上も前に、俳句を勉強させていただき再度お世話になりますがよろしくお願い致します。

香川　高倉美恵子

昨年十一月、私用で上京の折、偶然にも新宿で遠藤風琴さんと出会いました。何とも奇遇で、これも御縁と「わかば」に入会させていただきました。よろしく御指導のほど、お願い申し上げます。

香川　竹林　愛子

誌友白川美智子さんが突然旅立たれ、私達香川「わかば」一同深い悲しみと淋しさに耐えています。いつも物静かでおだやかな美智子さんを忘れません。香川「わかば」の発展を大空から見守って下さっていることでしょう。愛子

香川　中村　玲子

総本山善通寺に歩いて一分のところに家があり、正月は都会のように賑やかです。除夜の鐘をききながら年越しそばを頂きます。

徳島　葉柳美智子

おじゃましている藍のお家へ一月三日阿波の木偶廻しがおいでました。一年間の家内安全、五穀豊穣をご祈祷されておりました。貴重な機会を拝見させていただきました。

編集後記

■まさをなる空よりしだれざくらかな　風生

今年は桜の開花期間が例年になく長かった。方々へお出掛けになって桜を堪能なさったことだろう。

先日、艸魚洞の二本の桜についている毛虫を風生先生手づから焼いたという話をうかがった。（そのうち奥様が毛虫を嫌がられるので、桜は伐ってしまわれたとか）毛虫を焼く時に棒に使い古しの絹を捲いて油を浸して焼くのだそうである。一頻り何故絹を使用するのか、その場の話題になった。どなたかご存じの方にご教示いただきたい。

◇三月号の本欄で少し触れましたが、本号から数回にわたって、あらきみほさんの虚子俳句研究ノー「虚子と虚子をめぐる俳人たち」を掲載いたします。あらきみほさんは、この一月に急逝なさいました。師系は深見けん二さんです。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

（いづみ）

■今月もわかば編集所のお庭を楽しませていただきました。赤いマンサクの花は満開で、出猩々（でしょうじょう）というもみじの赤い葉の下にも小さな可愛い花がたくさん咲いていました。ご主人様から黄色いバラがお好きな風琴代表に贈られた、一輪咲くと何ヶ月も咲いているという不思議な薔薇も咲いていました。

（M）

■今年の桜は気候が不順で開花が遅くお騒がせでしたが、その分長く楽しんだような気がします。私はあの大雨の前日、中越高田城址にて満喫してきました。俳句を始めてから知らない文字や詞が多いことを改めて感じています。このまえは「霾」に遭遇しました。初めは動物かしらと思いましたがバイと読み、つちふる・黄砂のことと知って驚きました。毎年大陸からやってきますが今年は大量だったようです。難しい季語で果たしてお手あげでした。

（Y）

■桜蘂が降る頃になると府中はくらやみ祭の準備に入ります。五月の連休は祭一色、鰡背な若者が太鼓をたたき神輿が練ります。まだ二週間もありますが　商店街には提灯が連なり大國魂神社では荒神輿がぶつかって事故が起きないよう石灯籠を添え木で囲ったり、報道陣のためのパイプで組み立てた櫓ができたり観光案内所にはパンフレットがいっぱい。来年は句帳を持ってどうぞお祭におでかけください。すてきな句ができること請け合いです。

（A）

わかば（五月号）

令和六年　四月二十六日印刷
令和六年　五月　一　日発行

発行人　遠藤風琴

〒一七一―〇〇一四
東京都豊島区池袋二―二四―二四

わかば編集所

〒一七一―〇〇一四
東京都豊島区池袋二―二四―二四

電話　〇三―三九七一―〇〇七八
FAX　〇三―三九七一―〇〇七八
e-mail　endofukin@gmail.com
振替　00970―4―239658
加入者名　わかば

印刷・製本所　東京都新宿区中里町二七
株式会社　教文堂

誌代
一部　一、〇〇〇円
半年分　六、〇〇〇円
一ヵ年分　一二、〇〇〇円